

赤十字NEWS 2

FEBRUARY.2024.#1005

Japanese Red Cross Society NEWS

特集

能登半島地震、日赤の活動

被災地へ希望を届ける

▶ P.2



TOPICS

ACTION! 防災・減災 プロジェクト
上白石萌音さんと学ぶ身近な人を救うノウハウ
トルコ・シリア地震から1年。被災者の支えとなった皆さまの寄付
その支援は、瓦礫の中から立ち上がる力に
..... P.4-5

連載

国内災害救護 まるわかり辞典 P.4
献血ハートフルストーリー P.5

AREA NEWS

[埼玉] 地元奉仕団と短大生が連携
手作りお弁当で高齢者と交流会
[神奈川] 羽田の航空機炎上事故に
日赤救護班が出動
[福井] こども園へ絵本 一人暮らし高齢者へエコバッグ
赤十字奉仕団が寄贈
/他 P.6-7

WORLD NEWS

貧困への諦めの心を変える、ルワンダの“水”支援
..... P.8

Present!!

株式会社ウィリングハンズ
「もつ鍋 味噌味(2~3人前)」

プレゼント!
5名様

詳しくは
P.7をCheck! ▶



CONTENTS

特集 能登半島地震、日赤の活動 被災地へ希望を届ける

SPECIAL FEATURE

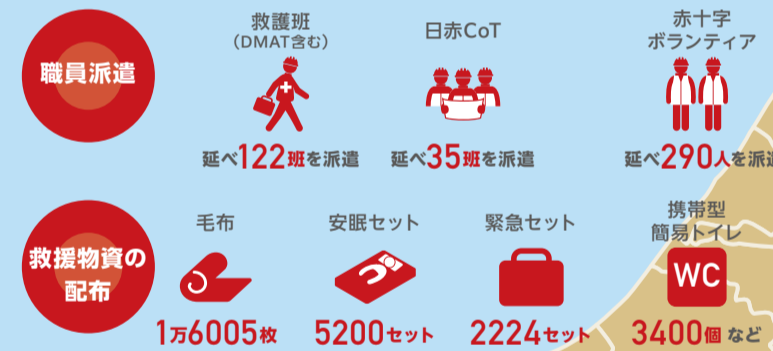
令和6年1月1日に発生した能登地方を震源とする地震は、石川県を中心に甚大な被害をもたらしました。多くの人が日常を奪われ避難生活を送る中、日赤は発災直後から救護班の派遣や救援物資の配布など、被災地の支援に動いています。今回はその活動状況を報告するとともに、被災地の生の声をお届けします。



①・③ 1月8日、矢田郷地区の避難所にて、被災者と言葉を交わす日赤福岡支部の救護班(福岡赤十字病院)
② 1月9日、輪島市立大屋小学校避難所にて、新生児を抱く日赤岡山支部の救護班(岡山赤十字病院)

日赤は、発災翌日の1月2日から災害医療コーディネーターチーム、および救護班(DMATを含む)を現地に順次派遣し、被災者の手当てや診察などの救護活動を開始。避難所や医療支援が届きにくい孤立した集落や施設へ向けては、巡回診療も行っています。また、多くの赤十字ボランティアの協力により、毛布や安眠セット、簡易トイレなどの救援物資を配布する活動も実施しました。さらに、1月4日からは「令和6年能登半島地震災害義援金」の受け付け口座を開設。寄せられた義援金は被災地の方々の生活を支援するため、全額を被災地の義援金配分委員会へ送金します(事務手数料は頂いておりません)。

日赤の主な活動状況 (1月19日時点)



※日赤CoT:日赤災害医療コーディネーターチーム



被災地からの声



寺田 静江さん (82歳・七尾市)

「地震が起きたのは、お正月のおせちを食べ終えて、居間でつくろいでいたとき。立ってられない大きな揺れにびっくりしました。避難所ではトイレを流す水がないのでみんな水くみに行きます。在宅避難している人も手伝ってくれて、みんな大変な中なのに人のやさしさが身に染みるというか、心温まります。うちの避難所はみんな清潔に保っているから、きれいですよ。地域のつながりで頑張っています。日赤のお医者さんが避難所にきて診てくれたのは、心強く感じました。こうやって話を聞いてくれるのもうれしいんです!」



野木 清さん (63歳・輪島市)

岡山赤十字病院救護班の診療を受けた野木さん。臀部にできた粉瘤(ふんりゅう)切開の痛みをこらえ、簡易ベッドの上でうつぶせのまま、見守る日赤の看護士に「人間って、弱いなあ」と言葉を投げかけ…。
「避難所では食生活も糖質ばかりで偏るし、ストレスもある。それでも赤十字の外科の先生に処置してもらえたのは幸運でありがたかった。輪島朝市の火災で自宅も何もかもなくして落ち込んでいたけれど、もう一度ゼロから頑張るしかない、頑張ってみようと思えそうです」



輪島市のご夫妻

大阪赤十字病院救護班による診察を受け、安心した様子のご夫妻。
「11月に退院し、通院が必要なのに交通が遮断され、病院に行かれん状態です。不安な状態にあるもんで、診てもらえて、話もできて…」(夫)
「何も持ってこれなかったのも、日赤さんから毛布をいただけて、すごくうれしいです。避難所の皆さん、喜んでと思いますよ、皆さん下に(日赤の毛布を)敷いてらっしゃるでしょう。これ一番最初にいただいて、助かってます」(妻)



避難所運営者 小路 貴穂さん

「日赤の毛布は100枚程度届きました。雪が降ってきて寒いので、エアコンのない体育館にいる避難者の方が持っていききました。迅速にご支援をいただけてありがたいです。これから寒くなるので、乗り越えたいですね。この避難所の方々はこれからどう頑張っていくか、不安もあるけれど、皆さんの応援が大変心強い力添えとなっています。一步一步進んでいきますので…、復興まで長くなると思いますが、皆さんもご協力よろしくお願いします」



日赤救護班 大阪赤十字病院 黄文禧医師

避難所での感染症拡大を防ぐため、熱心なアドバイスをもらった黄医師。「この避難所では、発熱患者20人弱と下痢患者3人を、一般の方と分けて(隔離)しています。毎日、救護班が避難所を巡回して体調不良の方に対応していますが、今日診た患者さんは、新型コロナの症状がみられました。大阪赤十字病院からは救護班が2班入っていて、全国の赤十字病院から来た救護班でつないで医療支援を続けています」



日赤救護班 福岡赤十字病院 荒武 憲司医師

避難された方からあふれる言葉の数々を、ときにユーモアも交えながら受け止め続けた荒武医師。話す避難者の涙声もいつの間にか笑い声。「問診とも違って、避難所におられる方、全員に声をかけるようにしています。その中で、何かちょっと問題があるなという方に対してはもちろんだ診察。話すうちに泣く方もいらっしゃるんですけども、思いをさらけ出してもらえたら、心も落ち着くかと。どんより暗い気持ちで過ごすよりは、少しでも笑顔になってもらえたら」

義援金の受け付けについて

お寄せいただきました義援金は、被災県が設置する義援金配分委員会へ、全額が送金されます(事務手数料は頂いておりません)。

義援金名
令和6年能登半島地震災害義援金

受付期間
令和6年1月4日(木)~令和6年12月27日(金)

協力方法
日本赤十字社WEBサイトをご覧ください。
※寄付先には「被災地全域への寄付(日赤本開設口座)」と「地域を限定しての寄付(日赤支部開設口座)」があります。

日本赤十字社WEBサイト
https://www.jrc.or.jp/contribute/help/20240104/



活動資金に
国内災害における救護活動、救援物資の配布などには、平時の戸別訪問やクレジットカードを通じた皆さまからの活動資金寄付や会費などが活用されています。詳しくは日赤WEBサイト「寄付する」ページをご確認ください。

T O P I C S



1 TOPICS

ACTION! 防災・減災 プロジェクト 上白石萌音さんと学ぶ身近な人を救うノウハウ

毎年、3月と9月に実施している啓発プロジェクト「ACTION! 防災・減災 一命のために今ごく一」。東日本大震災から10年を機に2021年にスタートした同プロジェクトでは、1年365日の日々の中でできる「防災・減災への備え」を発信しています。

一人一人の防災意識を高め、地域の防災力を向上させていくことで、災害で失われる命を減らすことができる—という思いで、毎回さまざまな企画を展開。今年は、災害に備えて“今”何ができるかという視点から、身近な人を救うための知識や技術を身につけることができる救急法講習の心肺蘇生をメインビジュアルにしました。2月20日に公開する特設サイトでは事故や災害時に命を守ることにつながる救急法のポイントを、日赤のアンバサダーである上白石萌音さんと共に学んでいくことができます。

サイトのイントロダクション記事では、「もしもの時の3つの備え 救急法ハンドブック」として「**手当ての基本**」「**胸骨圧迫とAED**」「**三角巾を使ったきずの手当て**」の3つに焦点を当て、正しい手法や注意点をレクチャーしています。例えば、「**手当ての基本**」では、周囲の安全・自分自身の安全を確保した上で、傷病者を観察(出血や意識の有無など)することが大切です。観察後、危険な状態と見られる場合は直ちに大声で協力者を求め、119番通報とAEDの手配を行うことをポイントとしてあげるなど、人を救うための行動のフローを分かりやすく紹介しています。この他、日赤の「健康生活支援講習」「幼児安全法」「水上安全法」のカリキュラムの一部も掲載。もしもの時に、すぐにアクションを起こせるよう、その日に備えて身近な人を救うノウハウを学びましょう。



プロジェクトの詳細は特設サイトでご案内します
<https://www.jrc.or.jp/lp/save365/>

2/20 公開予定

そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。
 今回は「**避難所生活で心と体を守るために**」です。

昨今、避難方法は多様化していますが、実際の避難所運営には地域の住民が携わる、ということをご存じでしょうか。避難所に届く支援物資の管理や配分、ごみの処理や掃除といった役割を、被災者自身で分担することは珍しくありません。その避難所生活の中で、特に重要になるのが衛生面の管理です。例えば、避難所のトイレは多くの人々が利用し続ける中で問題が生じやすく、気がついたときには使えない状態になっていることが、しばしば起こります。また、寝る場所や食事など、多くの人々が同じ空間で生活するため、避難者の一人一人が衛生に対する高い意識を持って行動する

ことが、避難所内での病気や感染症のまん延を防ぐポイントになります。いずれにしても、「**自分たちの避難生活は自分たちでやる**」という、「**お客様**」ではない意識で向き合うことが大切です。日赤では、こういった**避難所生活の課題を知り、避難者目線で理解を深める**ために、赤十字防災セミナーの1メニューとしてカードゲーム形式の「**ひなんじょ たいけん**」という講座を開いています。実際の避難所も住民の協働が大切なので、グループ内で参加者それぞれが意見を出し、主体的に取り組む内容になっています。

他方で、在宅避難や自家用車避難など、避難所に行くことだけが避難ではありません。日頃から「**どうすれば少しでも快適に避難生活を送れるか**」を考え、避難生活に生かせる情報にアンテナを張り、万が一のための準備をしておきましょう。



赤十字防災セミナーのメニューの一つ「ひなんじょ たいけん」。避難所での生活の難しさや必要な心構えをカードゲーム形式で学んでいきます(写真右は使用カード例)

2

TOPICS

トルコ・シリア地震から1年。被災者の支えとなった皆さまの寄付 その支援は、瓦礫の中から立ち上がる力に

「2023年トルコ・シリア地震救援金」の支援報告

(募集期間: 2023年2月9日～2023年5月31日)

受付
金額

58億445万2579円

多くの方々からのご協力、誠にありがとうございました。

2023年2月にトルコ南東部のシリア国境付近を震源とした地震は、犠牲者約6万人、建物50万棟以上が損壊、避難者330万人以上という甚大な被害をもたらしました。またシリアは、以前から続く紛争の避難民も数多く居住し、経済制裁の影響で社会インフラが脆弱な状態にあり、地震前から1500万人が人

道支援を必要とする中での被災でした。地震発生時、場所によっては朝晩の気温がマイナス15度まで下がる厳しい寒さの中、現地の赤新月社の職員やボランティアは瓦礫の中から人々を救出し、温かい食事の炊き出しを行うなど、支援の最前線で活動し続けました。

国際赤十字(国際赤十字・赤新月社連盟、赤十字国際委員会)は、地震発生直後から世界中のネットワークを活用して多様な支援を行い、日赤では「2023年トルコ・シリア地震救援金」を通じた皆さまからの寄付による支援を進めています(下図)。これらの寄付は、食料・医薬品などの物資支援の他、保健医療の人的支援、居住や衛生に関するものなど、人々の命と健康を守るために役立てられています。日赤は国際赤十字と連携し、復興を見据えた被災地への支援活動を継続していきます。

日赤によるトルコへの支援

- 国際赤十字機関への資金援助: 18億1000万円
- 保健医療支援: 7億円 ・救援車両支援: 2億円
- 救援物資支援: 5500万円 ・厳冬期対策: 3億円
- 衛生支援(シャワー車両): 1億5000万円
- 中長期支援(復興支援・能力強化)など: 6億8500万円

合計: 39億円

日赤によるシリアへの支援

- 国際赤十字機関への資金援助: 7億1000万円
- パレスチナ赤新月社(シリア支部)への資金援助: 1000万円
- 保健医療支援: 6億2000万円
- 医薬品支援: 6000万円
- 中長期支援(復興支援・能力強化)など: 5億円

合計: 19億円



©TRCS
温かな食事は凍てつく寒さの中被災した人々を支えた(トルコ)



©JRCS
シャワーなどを搭載した車両により被災者の衛生環境を改善(トルコ)



被災地域

トルコ

シリア

※上記の金額には活動にかかる事務経費を含む。内容や金額は状況に応じて変更になる可能性があります



©JRCS
巡回診療に訪れた女の子に声をかける日赤の薬剤師(シリア)



©SARC
被災者から聞き取りを行うシリア赤新月社の職員と日赤の看護師(シリア)

献血ハートフルストーリー vol.2

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

治療現場で見た、血液製剤の力。そして製造する立場へ



今月のひと

profile

日本赤十字社
北海道ブロック
血液センター 製剤部
うえだ ようへい
上田 洋平さん

私は製剤部で、献血していただいた血液を使って血液製剤を製造する業務に携わっています。例えば、白血球に起因する副作用の減少を目的とした白血球除去や、リンパ球が輸血を受けた患者の体内で攻撃することを防ぐための放射線照射によるリンパ球不活化などを行っています。輸血は、献血された血液をそのまま使用していると思っている方もいるかもしれません。しかし、輸

血用の血液製剤はその名の通り「製剤=薬」であり、命を救うものであると同時に、他の薬と同じく安全・安心であることが大前提です。一方で、1人分の血液から製造できる血液製剤は限られているため、貴重な血液を、確実に医療現場に届けたいという思いで業務に取り組んでいます。

私は、日赤に入職する前は病院の薬剤師でした。患者さんの治療のために血液製剤を使用する側であり、投与された患者さんの健康状態が改善され、命が救われる場面に立ち会うたびに、その効果に感銘を受けていました。だからこそ、「患者さんを救う血液製剤を製造している」という意識を常に持って業務を行っています。血液製剤は、大量生産する工場のように原材料をひとつにまとめて製造することはできず、1人から提供された血液1バッグごとに作業を行います。そして、機械によるオートメーション製造の一般薬

と違い、工程の細部まで人が携わっています。血液製剤は、原料を提供する人も、製造する人も人という、たくさんの「人」の思いが込められた薬なのです。この製剤の現場は一部の血液センターでは見学が可能です。その工程を実際に見ていただき、献血のその先への関心を持っていただけるとありがたいですね。



At work

AREA NEWS

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。

神奈川

羽田の航空機炎上事故に日赤救護班が出動



1月2日の夕方、羽田空港において航空機の炎上事故が発生。日赤神奈川県支部と横浜市立みなと赤十字病院から救護班要員と連絡調整員計7人が派遣され、日赤医療センター救護班と共に、脱出した乗客のけがや健康確認などの対応にあたりました。

実は本紙では12月号にて昨年10月26日に神奈川県支部が参加した「羽田空港における航空機炎上事故対処訓練」を紹介。東京消防庁や警視庁など96機関合同・約700人で実施した先の訓練の記憶も鮮明なうちに、現実には大事故が発生。あらためて「訓練」が重要であることや、救護団体として急な災害・事故にも的確に対応できるよう、日ごろから技術を磨き、備えておく必要があることを実感する機会となりました。

大分

高校生から一人暮らしの高齢者へ～赤十字 愛の手紙～



12月2日、青少年赤十字(JRC)に加盟する大分市・別府市・臼杵市の高校生が、県内に住む一人暮らしの高齢者や老人ホームへ手紙を届けました。これは、高齢者の方々に温かい正月を迎えてもらうため、JRCメンバーで構成する「赤十字 愛の手紙実行委員」が中心となって行っている企画です。今年は10校133人が参加し、お手紙と手作りのしおりを作成。その後、代表して4校12人の生徒が、各地区の民生委員と一軒ずつ訪ねて手渡しをしました。

受け取った高齢者からは、「若い人から手紙をもらうことがないのでうれしい」と喜びの声が聞かれました。実行委員は、「温かい正月を迎えられるよう、これからも元気を届けたい」と語りました。

埼玉

地元奉仕団と短大生が連携 手作りお弁当で高齢者と交流会



吉見町赤十字奉仕団は、町内に住む70歳以上の独居高齢者を対象にした交流会を、12月4日に開催しました。この活動は、一人で暮らす高齢者が地域との関わりを持ちながら生き生きと生活できるよう、平成7年の奉仕団結成時から続けています。昨年度からは、地域活性化と学生の福祉意識の醸成を兼ね、地元の武蔵丘短期大学と連携。今回は栄養学を学ぶ学生が手作りの栄養満点のお弁当を提供し、短大講師による健康体操で共に体を動かすなど、終始笑い声に包まれ、心も体も満たされる交流会となりました。参加した高齢者からは、「地域の人と交流して元気をもらったので、長生きできそうです」と喜びの声が。ボランティアからも、「長年活動していますが、みんなが楽しそうに参加している様子に自分が元気をもらえます」などの感想が聞かれました。

福井

こども園へ絵本 一人暮らし高齢者へエコバッグ 赤十字奉仕団が寄贈



年間を通したアルミ缶リサイクル活動を30年以上続けている坂井市赤十字奉仕団坂井分団。今回、その収益金を活用して、33冊の絵本(4万円分)を市内の坂井こども園へ寄贈しました。奉仕団メンバーから直接絵本を手渡された子どもたちには笑顔があふれました。また、同分団では、一人暮らし高齢者への慰問品の贈呈も行っており、その活動の一環で、今回エコバッグ190個を手作り。それらは、12月11日に坂井市社会福祉協議会を通じて、市内の単身高齢者に寄贈されました。

京都

静岡

授業で、ファミリーイベントで、赤十字の教材で楽しく学ぶ防災



12月8日、京都市立桂坂小学校では、京都市青少年赤十字教育研究会による防災授業が実施されました。今年度は1年生を対象に、赤十字のイラスト教材「ぼうさいましがいがしきけんはっけん!」を使用して、災害時の正しい行動を学習。教材に描かれた災害の状況下で、「危険な場所とその理由」を考え、シールでマーキング(1)。さらに間違っている行動を〇×クイズで考えます。授業中、児童たちは活発に発言し、災害から身を守る方法を学びました。日赤静岡県支部では、12月9日に開催された浜松市防災学習センター主催のイベント「冬フェスタ2023～大人も子どももみんなで極める『家庭内防災』～」に参加。29組、約90人の親子が参加し、家族で過ごす時間が

が増える冬休みを前に、災害にあったときに安全に過ごすための備えを学びました。イベントでは、昨年7月に赤十字防災教育事業に追加された新プログラム「うちのキケン」を活用。実際に緊急地震速報の音声を通してテーブルの下に身を隠す(2)練習をするなど、命を守る行動を実践しました。また、体験型講座「きずの手当」では、直接圧迫止血とハンカチを使ったきずの手当ての方法を学び、子どもたちが率先して手当てを練習する姿が印象的でした。イベント後、参加者からは、「防災を堅苦しく考えず、楽しく学ぶことができた」などの感想が聞かれました。

京都

「身近な人の命を助けるために」奉仕団の研修会で救急法講習



箱型訓練キット「スクーマン2」で胸骨圧迫の位置・強さなどを確認



12月4日、中京地区奉仕団研修会が開かれ、松田聡赤十字救急法講師が救急法短期講習を担当しました。講習では、平成23年に当時さいたま市内の小学校6年生だった桐田明日香さんが駅伝の課外練習中に倒れて亡くなられた事故の事例を紹介。「普段通りの呼吸がない場合は、心肺蘇生をする」ということの大切

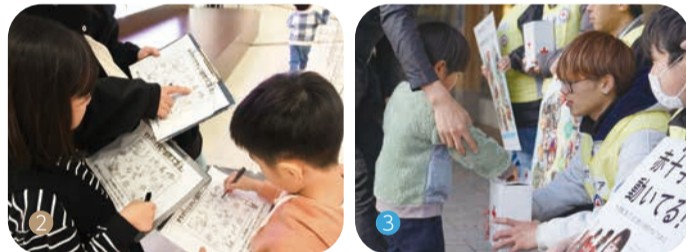
さが伝えられ、参加者も真剣に耳を傾けました。実際に胸骨圧迫を体験した方からは、「思ったよりも圧迫のタイミングが早くて大変」と実感する声も。松田講師は、「胸骨圧迫は一人では大変。誰かが倒れたり、苦しんでいるときは、多くの人が集まってみんなで助け合える社会であってほしい」と呼びかけました。

栃木

千葉

徳島

「NHK海外たすけあい」街頭募金や写真展で活動の輪が全国に



12月9日、日赤栃木県支部では、栃木県青年赤十字奉仕団と県内9校から集まった41人のJRC高校生メンバー(1)が、宇都宮市内の商業施設ベルモールにて「NHK海外たすけあい」の街頭募金を実施。お揃いの赤いサンタ帽姿で来店客に協力を呼びかけたメンバーの1人、秋澤勇希さんは「多くの人が足を止めてくれて心が温かくなった」と笑顔をのぞかせました。

また、千葉県支部では、12月10日にイオンモール幕張新都心にて、同キャンペーンにちなんだ「赤十字が見た人道危機 写真展」を開催。

武力紛争が続くウクライナやイスラエル・ガザでの人道支援の写真や、救護物資が展示されました。また、「国際人道法」に関するクイズ(2)などを通し、幅広い年代に世界の人道危機や赤十字の活動を伝える場となりました。

徳島県青年赤十字奉仕団と学生赤十字奉仕団のメンバー(3)も、12月17日に徳島駅前「海外たすけあい」キャンペーンの街頭募金活動を実施しました。奉仕団の柏木歩委員長は、「一人でも多くの命を救うために役立ちたいという思いで呼びかけました。集まった善意は人道支援を必要とする人のために活用します」と語りました。

Present!!



子どもたちに福岡の食文化の魅力と楽しさを伝える



「ふるさと納税」の返礼品にも選ばれた大人気の「もつ鍋」を、コロナ禍で支援してくれた地域・お客様への感謝をこめて子どもたちに無償提供

福岡を拠点に、もつ鍋専門店「もつ鍋 一藤」3店舗や「博多もつ鍋 いちたか」を展開する株式会社ウィリングハンズ。日赤との関係は10年以上にわたり、もつ鍋の売り上げが落ちる6月には、社員の意気高揚を兼ねて、来店した人数×100円を社会に還元するキャンペーンを毎年実施。昨年は1747人が日赤に寄付されました。

また、コロナ禍で経営が苦境に立たされた際にいただいた多くの御恩を返すため、コロナ禍が落ち着いた昨年、全店舗で350席を用意し、地元の子どもたちを「もつ鍋体験」に招待。地元の食文化に触れるとともに、この数年間外食の機会がなかった子どもたちに、仲間と一緒に外食を楽しむ場を無償提供しました。今後も定期的にもつ鍋体験の開催を計画しています。この他、地元の少年サッカークラブが備品不足に悩んでいたことから、用具の寄付や練習・試合の場を設けるなど、地域の喜びに貢献する活動を続けています。



5名様

もつ鍋味噌味 (2~3人前)



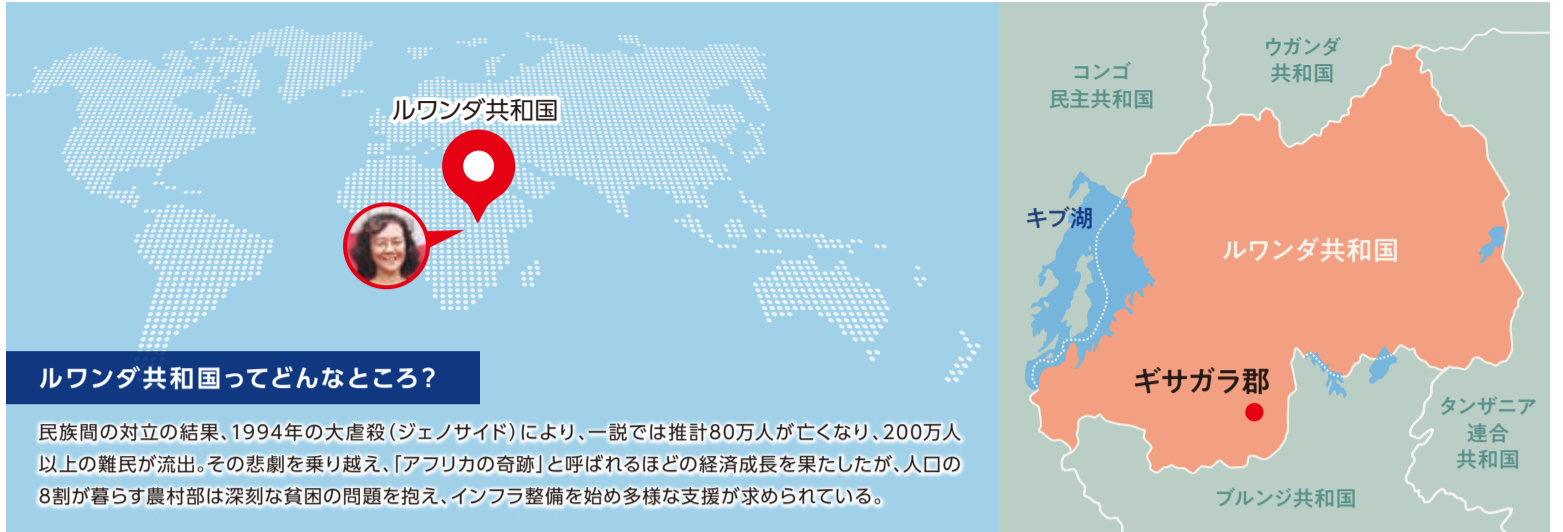
セット内容:秘伝の濃縮スープ 380cc、もつ 300g、チャンポン麺 2玉、その他(ごま、鷹の爪、作り方説明書) ※野菜、豆腐はセット内容に入っておりません

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS2月号を手に入れた場所 (例/献血ルーム) ⑥2月号読者アンケートの回答 (質問項目は右上の赤枠内)
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS2月号プレゼント係
WEB応募/右の2次元コードからご応募ください。
2月29日(木) 必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募は
こちらから





ルワンダ共和国ってどんなところ？

民族間の対立の結果、1994年の大虐殺(ジェノサイド)により、一説では推計80万人が亡くなり、200万人以上の難民が流出。その悲劇を乗り越え、「アフリカの奇跡」と呼ばれるほどの経済成長を果たしたが、人口の8割が暮らす農村部は深刻な貧困の問題を抱え、インフラ整備を始め多様な支援が求められている。

貧困への諦めの心を変える、ルワンダの“水”支援

日赤では、ルワンダ赤十字社と連携し、2019年から「ルワンダ気候変動等レジリエンス強化事業」を進めています。同事業は①水や衛生環境の改善、②環境・緑化対策、③生計支援、④持続性強化の4つの分野で、住民主体で地域の課題に取り組む環境をつくることを目指しています。同事業の現状について、日赤 国際部の山岸信子さんに話を聞きました。

食事から衛生面まで支える 水のインフラ整備の重要性

日赤の支援地、ギサガラ郡は、ルワンダの中でも辺境の地で、経済発展から取り残され、国内で最も貧しい地域の一つとされています。私たちの支援事業において、現地の人々の生活向上や気候変動に伴う災害リスクの低減といったさまざまな支援が模索される中で、当初から「水」に関する環境を整えることは重要なミッションでした。水は、衛生面や農業の質を向上させるために必須であり、人々の健康にダイレクトに関わるものです。しかし、ルワンダでは国民の4割が、徒歩30分以上かけて水くみをしている現状があります。今回の事業対象地となった南部のギサガラ郡は、勾配の大きい地形や村から水源が離れていることで、**水くみを担う女性や子どもの大きな負担**となっていました。人の手で運べる水の量には限界があるため、村や家での水の使い方は限られ、日々の手洗いはもちろん、掃除や洗濯、生活道具の洗浄の水も不足し、感染症のリスクが高いこと、さらに子どもたちが働くことで、学校に行く時間が失われてしまっていることも問題でした。これら水不足の地域の把握、またそこに十分な水を届けるための水源の調査を入念に行ったほか、一部の資金はルワンダ政府からも拠出されているため、多くの調整が必要で、ようやく2023年に入って水の供給インフラづくりを

進めることができました。具体的には、同郡の5つの村、900世帯を対象として、複数の水源から各村に全長13キロのパイプを敷設し、加えて、ポンプを安定して稼働させるために電気変圧器の設置や配線なども行っています。

インフラの整備が始まってからも、村人は本当に水が届くようになるのか、まだ半信半疑のようですが、それは彼らが水不足の状態です生活することが当たり前になっているから。実際に水道が使えるようになったら、生活全般だけでなく、考え方も根本から変わるかもしれませんね。**事業で実施した「生計支援」で、村人の中に自助努力や相互扶助の意識が根付いたように。**

生活基盤の向上が 貧困への諦めの心を変える

この事業の一番の目的は、赤十字の支援が終了した後も、**現地の人々が自分たちで生活環境を整え、経済活動に取り組んでいける基盤をつくること**です。今回の水のインフラ整備もその一つであり、水不足が解消された後のことを見据えた支援活動として、庭に家庭菜園を作る支援や、家畜の提供なども実施しています。また同時に、庭で採れた野菜を使った料理実演も行い、健康であるためにバランスの良い食事をとる大切さも啓発しています。食事だけでなく、手洗い指導、トイレの整備や建設

など、これまでルワンダ赤十字社と協力して推進してきた活動の成果として、子どもの下痢が減るなど、徐々に健康が改善している印象があります。

村人たちは、野菜や家畜を育てたり、「地域連帯クラブ」という会員制のルワンダ版町内会を設立してお金を出し合い、共済基金を作って将来に備えたりすることによって、自信と心のゆとりを持つようになりました。かつての彼らには、国や外国の支援で作られたインフラが動かなくなっても文句すら言わない、「言ってもしょうがない」と諦めて受け入れる思考がありました。しかし**現在は、自分たちの問題は自分たちで何とかしようとする意識が芽生えた**のは確かです。

わずか30年前にルワンダで起きた、大虐殺の記憶が大人たちから消えたわけではなく、みんな痛みを抱えながら生きています。人々はお互いの気持ちと立場を慮り、平和な日常を祈って暮らしています。ルワンダの人々の不平不満を言わないところは、その影響もあるのかと想像しています。彼らには彼らの歴史や、長年その地で培ってきた生活の知恵があるわけで、そこには外国人の私たちが提供する知識よりも理に適ったものもあると思います。これから、水道によって生活が変わることで、生活全般への視点も変わっていくはずで**地域に根ざした赤十字だからこそ**、細やかに現地の人々の声を聞き、寄り添った支援ができれば、と考えています。



山岸 信子

(やまぎし・のぶこ)
国際部 開発協力課

アジア、アフリカの開発途上国9カ国で開発協力を従事、新型コロナウイルス感染症の世界的流行で帰国するまで、人生の半分以上を開発途上国で過ごす。現在は日赤本社国際部アフリカ担当。



ルワンダ赤十字社のボランティアと山岸さん
(左から5人目)



赤十字の家庭菜園作りの支援で、村人の健康意識にも変化が



水源で水をくむ村人
(右は現地駐在の日赤職員・吉田拓さん)